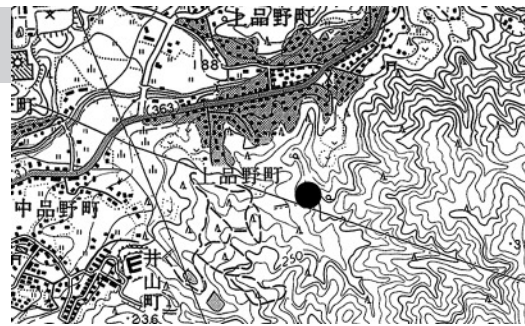


なかぼらかま
中洞窯跡

所在地 瀬戸市上品野町地内
調査理由 東海環状自動車道
調査期間 平成 13 年 7 月～ 10 月
調査面積 1,200 m²
担当者 服部信博・藤岡幹根・川添和暁



調査地点 (1/2.5 万「多治見・猿投山」)

調査の経過 本遺跡の発掘調査は東海環状自動車道建設の事前調査として日本道路公団中部支社岐阜工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。調査面積は 1,200 m² で平成 13 年 7 月から 10 月にかけて実施した。

立地と環境 中洞窯跡は、瀬戸市東部、上品野町の品野盆地を囲む丘陵内に位置する古窯である。水野川の支流である中洞川の右岸、丘陵の南西斜面に立地しており、標高は 225m である。周囲には、宇トゲ窯跡・上品野窯跡・稲荷北神社北窯跡・桑下窯跡・上品野丸山窯跡など中世古窯が多数知られている。

調査の概要 遺跡全体は中洞川の堰堤建設時にかなりの破壊を受けていたものの、調査によって、遺跡が南西方向に開口する谷地形の斜面に立地していることが明らかになった。確認された遺構は、窯体 1 基・作業施設 3 基 (1 基はロクロピットが見られる)・整地部分 (作業空間)・灰原である。操業の時期は古瀬戸中期 II 段階から古瀬戸中期 III 段階までと考えられる。窯体は谷地形方向の北東―南西方向に作られており、整地部分は焚口から前庭部にかけてに見られる。灰原は、前庭部から南西方向の中洞川に向かっての傾斜地に形成されている。調査区北東から南西にかけて谷状地形出自の水流によって、全体的に二次堆積の様相を呈する結果となっている。

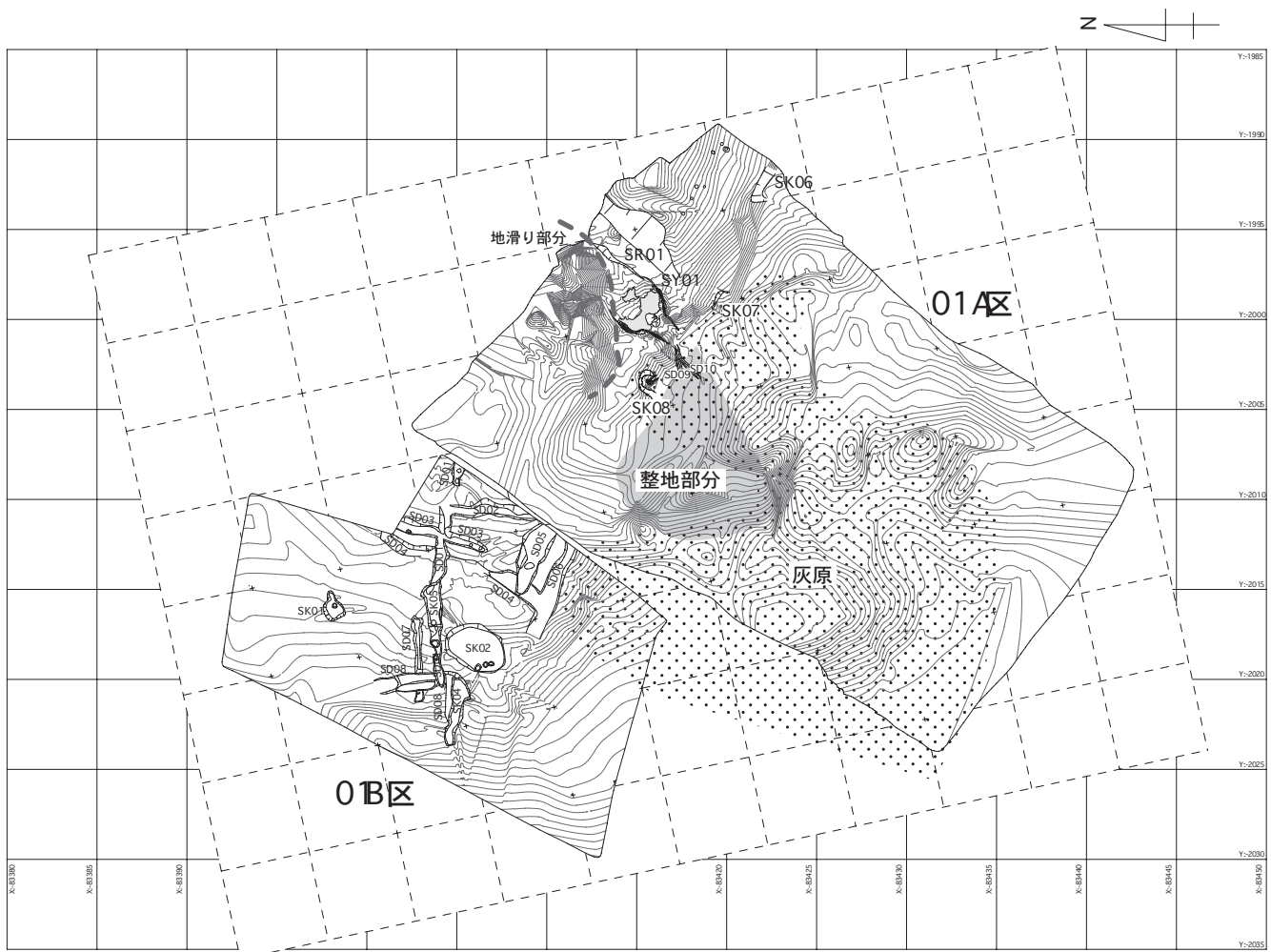
遺 構 窯跡は燃烧室から焼成室にかけてのみが確認され、全長のおよそ 2 分の 1 のみが残存している。残存部での全長は約 3.5m、最大幅は焼成室で約 2.5m、最大傾斜約 30 度、最深部は分焰柱部分で約 80 cm を測る。断割りの結果、窯壁で 3 回、床で 4 回の補修が確認できた。窯体の上半部は地滑りにより大きく破壊を受けており、地滑りの成因としては、大地震や集中豪雨などによる地盤の緩みと考えられる。調査により西方向に崩落し大きく陥没した状態で地滑り跡が検出された。

作業施設としては 3 基検出された。SK06・SK07 はともに窯体東側に位置し、南側の大部分がすでに破壊を受けていた。SK08 は窯体西側に位置するもので、長軸 130 cm・短軸 110 cm、深さ 60 cm を測る風化花崗岩を竪穴状に掘り込んだ遺構である。遺構の中心部にさらに長軸 35 cm・短軸 30 cm の小ピットが検出された。中心部分径 15cm ほどが筒状に土の変化が見られることから、ここがロクロの軸受け部分であったと考えられる。

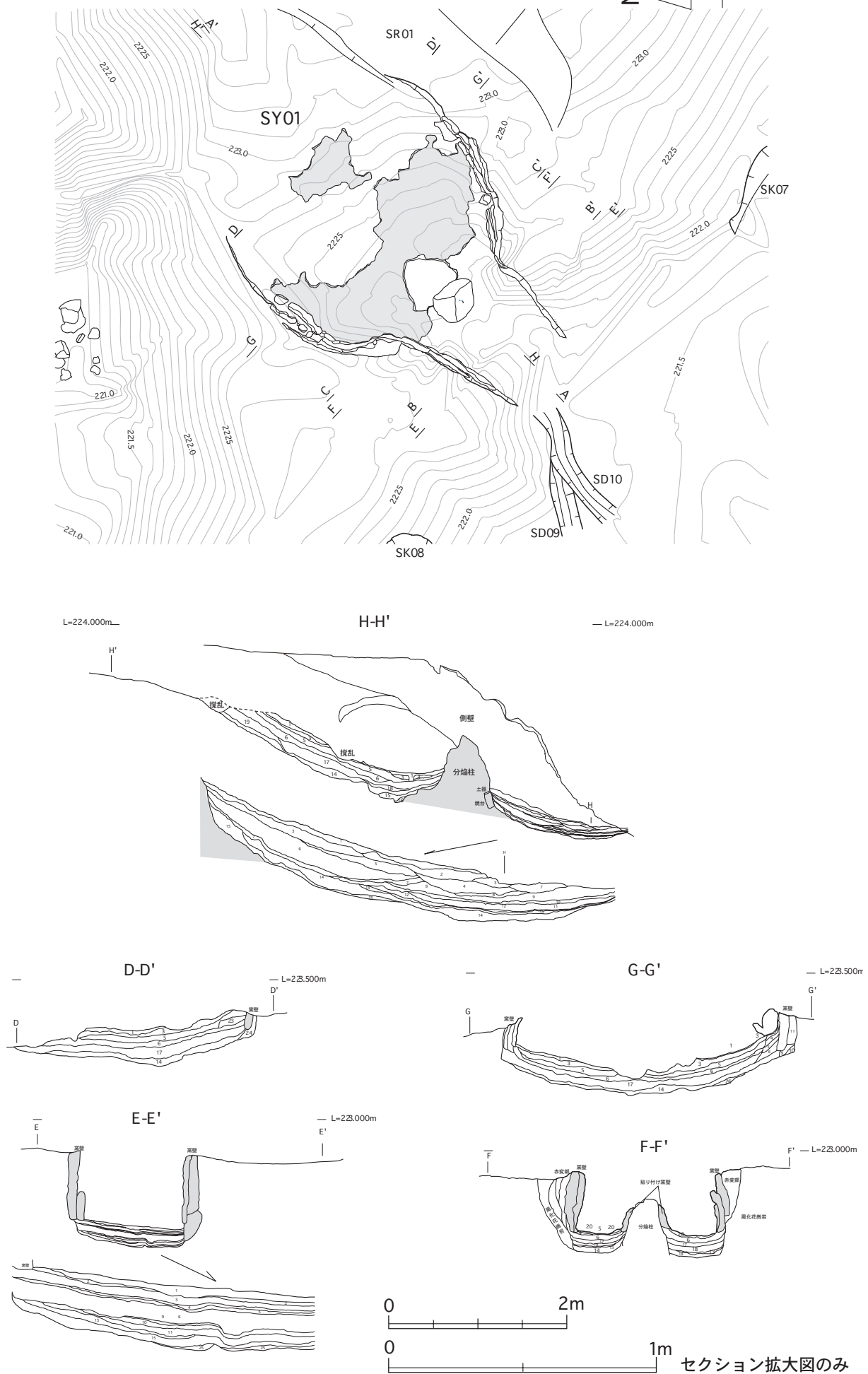
出土遺物 古瀬戸および山茶碗との両者がみられる。古瀬戸では碗・天目茶碗・折縁深皿・卸皿・柄付片口・花瓶・四耳壺・瓶子・水注などの器形が、山茶碗系では碗・小皿・片口鉢が見られる。その他、匣鉢・陶丸なども出土している。古瀬戸および山茶碗は両者とも一定量出土しており、ともにここで生産されていたと考えられる。

調査の成果 調査により、古瀬戸中期Ⅱ段階からⅢ段階にわたって操業された当時の窯業生産の場が確認できた。尾根を越えて反対側に作られた宇トゲ窯跡が古瀬戸後期段階であり、一連の変遷を理解できる貴重な資料となると考えられる。また、窯体には地滑りにより破壊を受けていることが確認され、今回の特筆すべき成果として注目される。

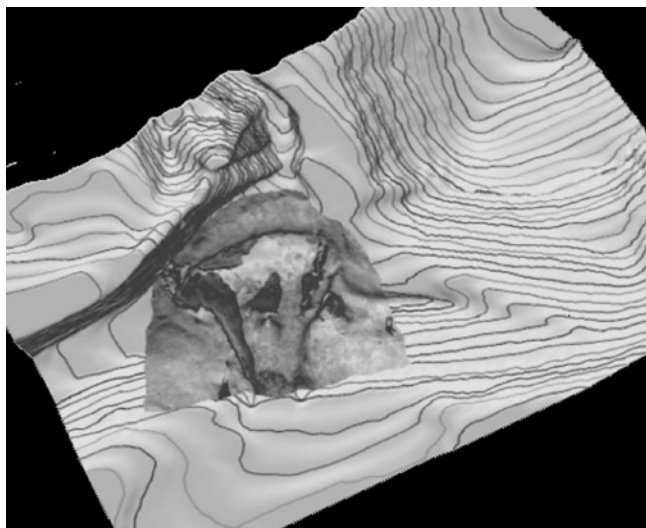
末尾になりましたが、中洞窯跡窯体の地滑りの評価について、愛知県立大学鈴木康弘先生より多大なるご教示を賜りました。ここに感謝の意を表します。(藤岡幹根・川添和暁)



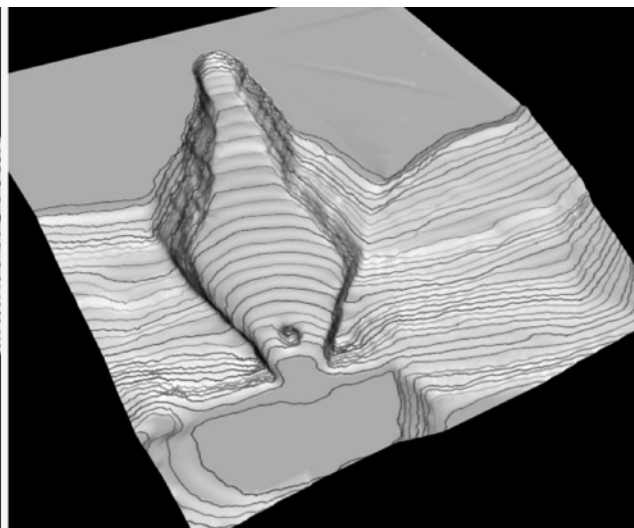
第1図 遺構配置図 (1:400)



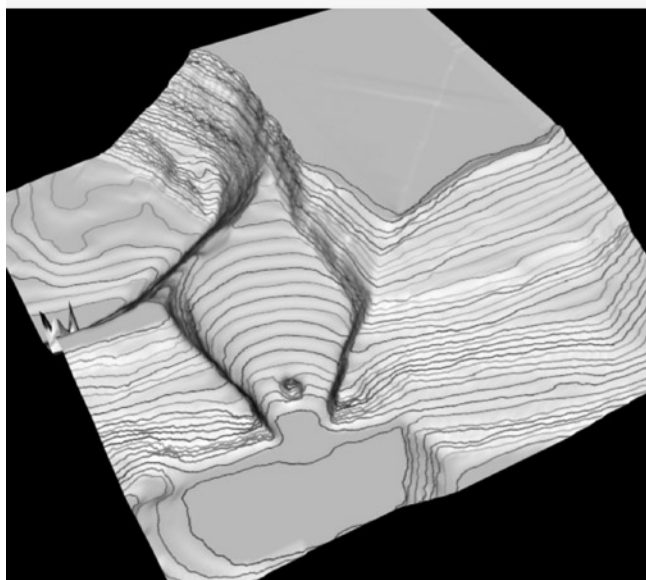
第 2 図 SY01 (1:60 セクション拡大図のみ 1:20)



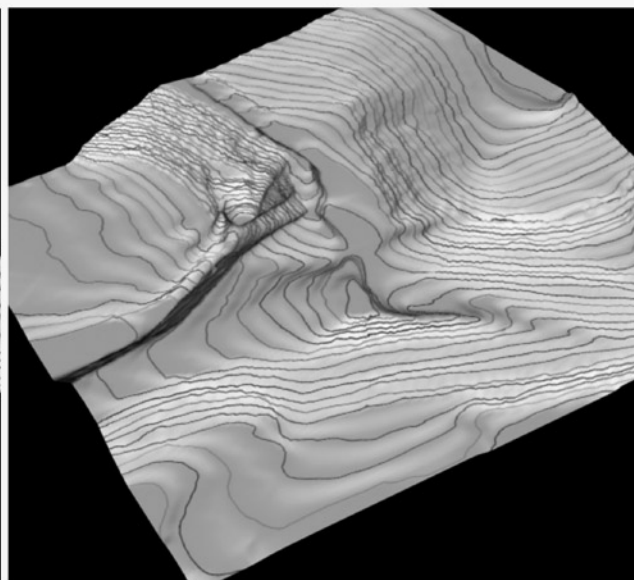
発掘データ



窯創業時



崩落後



道路開鑿時

第 3 図 中洞窯跡の変遷



作業風景



窯体と地滑り部分（北西より）